

日本ワクチン学会 ニュースレター

vol.6

目 次

1. 第6回日本ワクチン学会学術集会報告
 - 1) 第6回日本ワクチン学会学術集会を主催して 堀内 清……………2
 - 2) シンポジウムまとめ 中山哲夫……………2
 - 3) ワークショップまとめ 奥野良信……………3
2. ワクチン関連トピックス
 - 1) トピックスI 『風しんワクチンを受けましょう』……………4
 - 2) トピックスII 『新型インフルエンザ情報』……………4
 - 3) トピックスIII 『肺炎球菌ワクチン海外情報』……………5
3. 第7回日本ワクチン学会学術集会のお知らせ
 - 第7回学術集会会長 浅野喜造……………6
4. 会員会告
 - 1) 2002年度第2回理事会議事録(2002年11月29日)……………6
 - 2) 第6回日本ワクチン学会総会議事録(2002年11月30日)……………7
 - 3) 理事選挙に伴う会員名簿の発行について(重要)……………8

§ 第6回日本ワクチン学会学術集會を主催して

第6回日本ワクチン学会学術集會 会長 堀内 清

平成14年11月30日、12月1日の両日、千葉市文化センター「アートホール」にて開催した。開催地の千葉市は東京からJRの快速電車で40分と、全国から御参集の方には不便をおかけしたが、会長が千葉県血清研究所および同衛生研究所に勤務した関係で千葉県の県都である千葉市で開催することになった。

今学会は千葉県衛生研究所、千葉県血清研究所、千葉市環境衛生研究所の職員による手造りで、学会運営会社の援助は一切受けなかった。

さらに千葉市および千葉県から多大の経済的な支援をいただくことができた。これらの関係機関に心から御礼申し上げる。

さて、今回初めてワクチンメーカーによる製品の展示を試み、会員諸氏に好評であった。学術集會の内容は会長の出自にご配慮を頂き、プログラム委員会の卓抜なアイデアによる「地球に優しいワクチン」をテーマに、主にハードに主題をおいた構成になった。「製造法」「混合ワクチン」「新ワクチン」につい

てシンポジウム、教育講演を企画した。特に混合ワクチン化が進んでいる動物ワクチンに関する講演は、この分野の人体用ワクチンの開発の遅れを痛感させられた。上田、中山博士に感謝したい。

また、51の一般演題を頂いた諸先生に深甚なる感謝を申し上げる。

特別講演の内容は例をみないユニークなものであったが、安村博士の名誉のために補足させて頂くと、Vero細胞は先生が千葉県血清研究所において血の滲むような研究の成果で、大変な「照れ屋」である御性格があのようなお話になったと推測される。得てして大変な研究を成し遂げた方に限って、自分の苦勞話をしないのは、この度のノーベルプライザーに見られる通りである。

最後に御参加下さった367人の会員諸氏に改めて厚く御礼申し上げ、来年の浅野会長の学術集會がより盛会であることを祈念して第6回学術集會の総括とした。

§ シンポジウムまとめ

テーマ『地球に優しいワクチン』

座長 田代 真人 (国立感染症研究所ウイルス第三部)

中山 哲夫 (北里生命科学研究所ウイルス感染制御)

- ・生ポリオワクチンから不活化ポリオワクチンへー国産不活化ポリオワクチンの特徴と開発の意義ー堀江 均 ((財)日本ポリオ研究所)
- ・組織培養日本脳炎村木 優子 ((財)阪大微生物病研究会・観音寺研究所)
- ・組織培養インフルエンザワクチン城野洋一郎 ((財)化学及血清療法研究所・デシカ生研(株))
- ・日本で市販されていない人体用多価ワクチン高山 直秀 (東京都立駒込病院)
- ・動物多価混合ワクチン山中 盛正 ((株)微生物化学研究所)

感染症対策にワクチンの果たしてきた役割は大きなものがあります。多くのワクチンがpotential risk/vaccine benefit, cost/benefitの考え方から開発研究され実用化されてきました。一方、科学の進歩は、利便性、生産性の重視から環境汚染、生態系の破壊とヒトを含めた地球環境に大きな変動を強いてきました。いま、私たちは科学の進歩の恩恵にあずかる一方、地球の生態環境に対しては大きな負債を負って窒息寸前にあるのではと思われまます。ワクチンの開発・研究・製造・検定に関しても、多くの資源の使い、動物を犠牲にしています。これからのワクチン製造、開発研究に関してワクチン自体のcost performanceだけではなく生態環境にも配慮する時代になってきており、こうした観点から「地球に優しいワクチン」のシンポジウムが企画されました。

野生型ポリオが根絶されつつある現状で生ポリオから不活化ポリオへと転換が急務であるポリオワクチンに関して「生ポリオワクチンから不活化ポリオワクチンへー国産不活化ポリオワクチンの特徴と開

発の意義」という演題で日本ポリオ研究所・堀江先生から御発表がありました。現在、マウス、発育鶏卵と動物個体をもちいて製造されている日本脳炎、インフルエンザワクチンの組織培養型ワクチンについて「組織培養日本脳炎ワクチン」「組織培養インフルエンザワクチン」の演題で阪大微生物病研究会・村木先生、化学及血清療法研究所とデンカ生研の共同研究を城野先生が御発表になりました。生物資源の確保のみならずワクチンの安全性の改善にもつながるものと考えられます。

ワクチンの接種機会を少なくし接種希望者の負担軽減のために多価・混合ワクチンが開発されており、ワクチン製品、注射器等の資源の有効利用の利点もあり「日本で市販されていない人体用多価ワクチン」

の演題で東京都立駒込病院・高山先生から多価・混合ワクチンの導入が望まれる旨の御発表を頂きました。多価・混合ワクチンは動物ワクチンでは既に多くのワクチンが多価混合ワクチンである現状とこれからの検討課題について「動物多価混合ワクチン」の演題で微生物化学研究所・山中先生から御発表を頂きました。

生態学 (ecology) という言葉は経済 (economy) に由来しております。ワクチンの開発研究・製造にも、これ以上ヒトを含めた生態環境への負債を増やさないよう配慮しなければなりません。

(北里生命科学研究所 ウイルス感染制御 中山哲夫)

§ ワークショップまとめ

テーマ『インフルエンザを巡る諸問題』

座長 奥野 良信 (大阪府立公衆衛生研究所)
森島 恒夫 (名古屋大学医学部)

わが国では一時、消滅の危機にあったインフルエンザワクチンであるが、再び見直され勢いを取り戻しつつある。それは、インフルエンザという疾患の本質が良く理解されるようになってきたからではないかと考えられる。年齢、地域を問わず誰もがインフルエンザに罹患し、それが示す症状、病態も多様である。したがって、インフルエンザワクチンに何を期待するかということに関しても、多角的に議論しなければならない。

ワークショップにおいても、臨床から基礎まで種々のアプローチでインフルエンザワクチンを評価する発表があった。特に目立ったのが乳幼児に対する接種を扱った発表で、その背景にインフルエンザ脳炎・脳症の存在があるのは明白である。アメリカでも2002年度の予防接種委員会の勧告で、初めて乳幼児に対して予防接種を勧奨したのは注目される。アメリカで脳炎・脳症が多発しているわけではなく、

多くの乳幼児がインフルエンザで入院していることが明らかになったため、日本とは事情が異なる。インフルエンザによる高齢者の重症化に対し、ワクチンが有効であるという認識はほぼ定着した感があるが、乳幼児に対する予防接種については研究が始まったばかりである。今後の調査研究の成果が期待される。

新しい抗インフルエンザ薬が登場し、更に迅速診断キットも発売され、爆発的に使われ出した。このような状況下で、インフルエンザワクチンの位置付けも変化してきているのは確かである。キットでインフルエンザを早く診断し、抗インフルエンザ薬を投与すればワクチンなど必要でないと考える人もいるが、予防の基本はワクチンの接種であり、その重要性に変わりのないことを忘れてはならない。しかし、インフルエンザに関する新たな問題が浮上する一方、診断、治療に急速な進歩が見られる現在においては、今までとは違った観点でワクチンを評価することも必要ではなかるうか。

(大阪府立公衆衛生研究所 奥野良信)

§ ワクチン関連トピックス

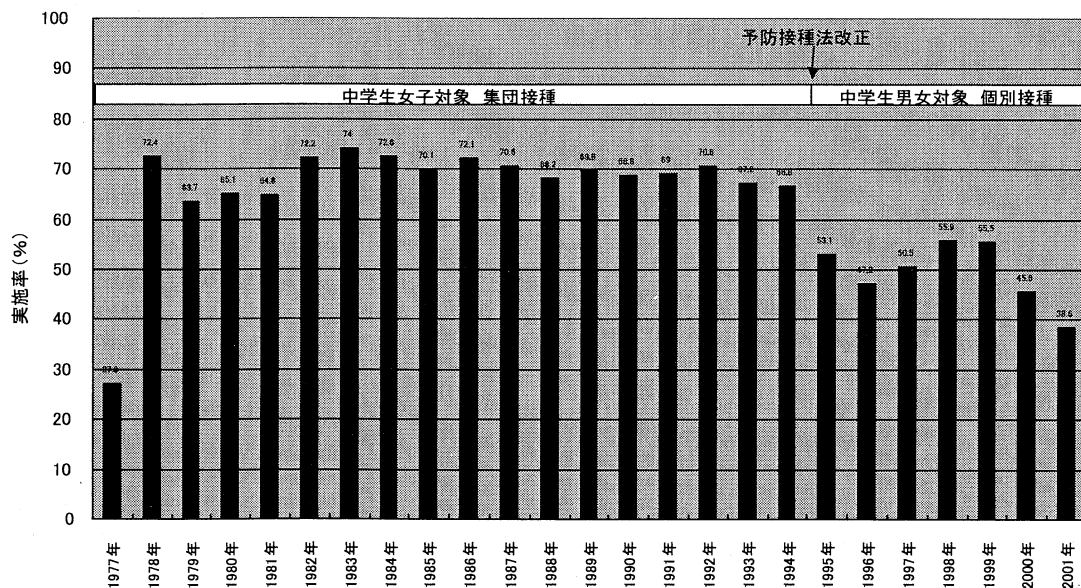
トピックス I

『風しんワクチンを受けましょう』

経過措置分の風疹ワクチンの接種率が極めて低い

ため、対象者（昭和54年4月2日から昭和62年10月1日生まれの男女全員）は是非この機会を逃さないように接種を受けましょう。今年9月30日までの暫定措置です。

中学生に対する風しんワクチン実施率（1977～2001年）（厚生労働省）



IASR 2003年3月号より

（関連情報）風疹および先天性風疹症候群（CRS）の予防の強化、2001～2002年—ブラジル（IASR Vol.23(7) p.181-182, 2002より：WHO、WER、77、No.21、169、2002抄訳）

1992年からブラジルの27州でMMR（麻疹・おたふくかぜ・風疹混合）ワクチンあるいはMR（麻疹風疹混合）ワクチンが徐々に導入され、1992～2000年の間にMMRワクチンは1～11歳の約95%に接種された。それに伴い、風疹の年齢別報告数は思春期後半～成人群に次第にシフトしてきた。1998～2000年に20～29歳を中心とした風疹の流行が起こったためにワクチン接種が推進され、Paranaでは1998年には15～39歳の女性の86%に、Rio Grande do Norteでは2000年に12～49歳の女性の72%にワクチンが施行された。ワクチン導入にさきがけた調査によると、15歳以下の小児の3%にCRSによる難聴が認められたとの報告があり、さらに、CRS報告数も1999年の38例から2000年の78例へと増加傾向にある。

そのため、風疹およびCRSを予防するためにMRを用いた予防接種計画を施行した。第1期は13の州

で、12～39歳の女性1,500万人を対象に2001年11月に実施され、95%の接種率であった。第2期は2002年6月15日～7月5日の間に、11の州で12～39歳の女性1,200万人を対象に行われる予定である。

トピックス II

『新型インフルエンザ情報』

1. 香港特別行政区でのインフルエンザA/H5N1患者発生（福建省からの輸入患者）

1) IDWR Vol.5(7), p.11-11, 2003より：WHO/CSR 2003年2月19日号抄訳

2月19日現在、香港特別行政区（以下香港と略す）で一人の子供からの検体が2カ所の研究室で検査され、トリ型インフルエンザウイルスが確認された。この患者からの2検体で行われた検査で、トリ型インフルエンザウイルスA/H5N1が同定された。1997年には香港で、類似したウイルスにより、18名の患者と6名の死亡者が発生した流行が起きている。